

第十六回 「公德文芸賞」 入賞作品および選評

【俳句部門】

▽最優秀賞

まっすぐに海に呼ばれる夏休み

尚綱2年 坂本 莉奈

【評】青春の海への志向を「海に呼ばれる」からという。あたかも青春の特権であるかのごとく、すらりと saying しているところがいい。「まっすぐに」が、その高揚感と明るい行動力を表示していて、いかにも青春の句、となっている。

(星永)

▽優秀賞

毎日がタピオカ日和夏休み

熊本信愛女学院2年 高橋 七紬子

【評】今若い人たちに人気のタピオカ。ダイエットにもいいし、食感も軽やかでスムーズ。しかも、自由な夏休み。この時代感覚の「タピオカ」に「日和」をくっつけて「タピオカ日和」とした造語のセンスもしなやか、軽やかで良い。いかにも自由に青春を楽しんでいる姿が見える。「毎日が」で始まり「夏休み」で終わるリズムも、若々しい。(岩岡)

渡り鳥僕ら一心にはばたいて

球磨工3年 前田 翔大

【評】渡り鳥と作者自身を一つに重ねて詠んで、いかにも真摯で若々しい。若者らしい一途な句。「僕ら一心にはばたいて」が、信条告白のようで美しく、読む者に共感と懐かしさを促してくれる。「渡り鳥」と一旦切って「僕ら一心に」と続く呼吸が若々しくていい。(岩岡)

素足から感じる土のエネルギー

阿蘇中央3年 山本 海央

【評】「素足」は夏の季語。「素足から感じる」が力強く、いかにも皮膚感覚あふれる直感の句。大地への賛美と、そこに根をおろして生きる逞しさがある。(岩岡)

朝露に宿る光を手の内に

宇土1年 田中 聖和

【評】朝露を哲学的に、あるいは宗教的に捉えて、それらを自らの内に「知」として「聖」として取り込もうとする、その姿勢を示した質の高い作品。よき「生」を探るための、これもまた一つの、青年期のありようであろう。(星永)

山茶花の白はかなしい友を待つ

尚綱2年 中林 萌々子

【評】へ白◇は喪の色、もしかしたら「かなしい友」はすでに存命ではないのかもしれない。その人を待ち続けるへ山茶花◇の白い喪失感が胸に響き、永遠の悲劇を物語る。(星永)

▽入選

蝸や母が私を抱きしめる

尚綱2年 工藤しほり

清流の音を彩る蛍の灯

第二1年 坂本 洸太

炎帝と赤信号につかまる日

尚綱2年 廣田 理子

食卓は父の力作夏野菜

第二1年 土佐 華純

八月のただ無になりたい今日この頃

玉名1年 塚原 洸平

▽努力賞

妹のおでこかわいい昼寝覚

尚綱2年 橋本 千佳

二階から蜻蛉の高さで阿蘇を見る

文徳2年 安武 承子

白川に夏の課題を捨てにけり

第二2年 佐藤 颯士朗

静寂の肩に止まりし夏の蝶

球磨工3年 村尾 飛月

夏トマト輝く露は僕の愛

阿蘇中央3年 矢野 聖也

赤信号夕日にとまる赤とんぼ

第二2年 水野 大地

シャープペンの芯の細さや今朝の秋

尚綱2年 大澤 かずの

父さんと行く夏休みの焼き肉

第二1年 野口 希夢

鞍岳の三角すいに入道雲

第二1年 中村 公哉

手を上げる警察ごっここの水でつぼう

球磨工2年 田山 紗稀人

▽学校奨励賞 阿蘇中央

【総評】この賞も十六回を迎えて毎年充実してきており、今年も昨年を大きく上まわる九百五十名の生徒の皆さんから二千二百二十句もの応募があり、ごらんのような優秀な作品が受賞しました。

個々の作品の選評はごらんの通りですが、今回初めて応募された方や受賞された方も含

めて、いい機会ですので、これからは非、俳句などの「短詩型」文学の創作に挑戦したり作品について語り合ったりと、日常的文学に親しんで下さい。

「人は『パン』のみにて生くる者に非ず^{あら}」といえますから、時々「ペン」の楽しみにもチャレンジして下さい。最優秀賞作品のように、夏休みとなったとたん「まつすぐに海に呼ばれる」と感じたことを率直に表現できたり、優秀作の「毎日がタピオカ日和」の句のように新しいことばを発明したりするのも、すごいことです。ことばをつくったりことばで応答する手応えや楽しみは貴重なものです。是非若いうちに、文字のほんの端っこでもいいのでふれてみて下さい。来年も、日常の中から生まれた、率直な感動のある句をつくって出して下さい。(岩岡)

年を追って応募数が増え、今年は二千二百二十句。この高まりは嬉しい。だが、毎年同じことをいうようで恐縮だが、質の高まりはいまいち。相変わらず「蟬はうるさい」「花火は美しい」式の、幼児的発想の句も多く、入賞作との格差が広がっている感じである。

その差を埋めるのは〈学習と訓練〉だと思う。応募の前にせめて一、二度、学校でその場を設けてくだされば、〈文芸賞〉の格が一段と高まるであろう。よろしくお願い致します。俳句は自己に眠る知性と感性を瞬時ゆさぶって、自己磨きをする文芸である。「花火は美しい」の感懐を一步すすめて、「美しいと思うのはなぜ？」と自分に問うて、湧いてくるもやもやにことばと韻律(リズム)を与えてまとめみる。うまくまとまらなくてもいい。問うことが一番、自己磨きになるのだから。それを繰り返す(学習と訓練)うちに、一つの形にまとまって、句ができる。来年はそれを見せてほしいと願っている。(星永)

【短歌部門】

▽最優秀賞

流れゆく月日は早く休み明けすぐそこにあるみんなの入試

尚綱3年 浦上 心菜

【評】折句「なつやすみ」で作った作品。しかも、高校生の夏休みの過ごし方を捉えて自然な感じで仕上がっている。それこそ半端でない(橋元)

▽優秀賞

風鈴がほてる体に心地良い風がふくたび恋する音色

第二一年 吉島 花音

【評】多感な思春期の乙女ごころが端的にうたわれています。確かに肌で感じる風、心で感じる風、それは虹のような色感をもって感じられたのでしょうか。若い乙女らしい繊細な感覚のきらめきがあって、感性の質のよさが十分に伝わってくる歌です(塚本)

帰り道「どの党にする？」と背伸びした少し大人に近づけたかな

芦北3年 濱崎 真琳

【評】平成二十七年六月に、みんなの代表を選ぶ権利が「満十八歳以上」に引き下げられました。初めての選挙を前にしての友と下校する道すがら、何かしら「大人」へ近づくような感覚になった様子が、素直に、面白く表現されています。(塚本)

ふと見ると木陰の居場所変わりけり秋になりゆく夕暮の道

尚綱2年 和泉 恭子

【評】短歌の形式を過去の学習から会得した作者であることがよく分かります。「木陰の居場所」の変化に目を止め、その発見をていねいに表現しています。そこに歌の大きな意味があります。歌は発見の詩型でもあるからです。(塚本)

セミの声おはようの声笑い声いつも通りの朝が始まる

熊本学園大学付属2年 山口 真依

【評】素直でリズムのいい歌。上の句にセミと人間の声三つを重ねて具体を現わし、下の句で朝の始まりを宣言した。さわやかさがみなぎる作品。(橋元)

昨日から降ってた雨が虹になり今日は歩いて帰ろうと思う

熊本マリスト学園1年 吉村 浩希

【評】雨がやんで、虹が出たから歩いて帰ろうという、単純と言えば単純な歌だが、そこはかとない詩情を感じられるところが魅力。「虹になる」と一度切った方が良かった。(橋元)

▽入選

たんぽぽの綿毛にそよぐ春の風宙舞う子たち母と別れて

文徳1年 杉本 彪瑠

土砂降りの空を見上げて我一人類を伝うは雨粒であれ

濟々巖2年 小屋敷 桃子

突然の雨に感じたぬくもりは一つの傘で分けあう気持ち

第二2年 徳永 菜

アイスティ手に持ちながら歩いてく僕が聴くのはあのラプソディ

第二1年 松本 拓也

星降る夜探せよ探せペルセウス流るる星に思いのせつつ

城北1年 才田 愁一

▽努力賞

教室の窓に差しこむ陽の光机に浮かぶ鉛筆の影

球磨工1年 中村 徳

教科書からあふれた文字は教室を満たして今日もその中を泳ぐ

熊本工2年 砂光 柊哉

炎天下果樹のライバルカズラ取りゴマダラカミキリアブラムシ類

芦北3年 谷地 柁希

サルスベリ三月続くか花盛り散るが花よと言われてもなお

宇土2年 室口 柊

「あとでやる」「明日はやる」をくり返しあつという間に七月おわる

玉名1年 井 楓

▽学校奨励賞 熊本マリスト学園

【総評】今年もレベルが上がると共に、作品に多様性が見られ、短歌らしい雰囲気の商品

が増えたのは喜ばしい。中でも、今年は折句の応募があったことだ。先生の指導によるものだと思うが、応募された十六首ともなかなかの出来栄であった。折句は短歌の五句の最初の文字を決めて詠むもので、伊勢物語の在原業平が詠んだ「かきつばた」が有名。「から衣 きつつなれにし つましあらば はるばるきぬる たびをしぞ思う」
今回は「なつやすみ」を織り込んだ作品で最優秀に選んだ歌のほかにも「七回裏 ツーランホームラン やつと出た スーパープレーで 見事優勝」涙ふき 月を見上げた 夜行バス すぐそばにいた 皆が恋しい」などよくできていた。

【自由詩部門】

▽最優秀賞

「たからもの」

仲間とともに、知らない人にも笑顔を届ける
そんなよさこいは私の光だ。
いつもいつも親や先生から言われる言葉
「これからどうする」
「将来何を仕事にするの」
みんな私を思ってくれている。有難いことだ。

でも、
自分を見失った。
私は何。何がしたい。
そんなことはわからない。

でも。でも。――。
ステージに立つと、踊ると、仲間とともに。
ああ幸せ。
このために私は生きている。

尚綱2年 原口 優希

【評】仲間とともに、見物の人たちに届ける 踊りの輪の中から、へよさこいは、私の光だ
〜と思う作者。へみんな私を思ってくれている。〜の文章を連れての心やさしい少女の詩で
す。詩人の困りの笑顔たちよ。

▽優秀賞

「解放」

裸足で駆ける君が笑う
靴音鳴らして僕が止める
白いワンピースが風に揺れる

慌てて制帽に手を伸ばす

「ねえ 傷だらけで勝ち取る自由とき
ねえ 綺麗なままで息苦しいのと
ねえ 君、どっちがいいと思う」

掴み損ねた制帽が 風に飛ぶのを見もせず
重い上着を脱ぎ捨てて 一つ軽く首を鳴らして
風に吹かれて 傷を晒した

濟々鬘2年

荒木 よしの

【評】登場人物の外側からのスケッチだけで詩のリンクを正確に書き上げたい作者の詩です。三連目のへ脱ぎ捨ててが貴重な詩的決断のカギです。

「テニス」

相手が邪魔をする

風が邪魔をする

日ざしが邪魔をする

心が邪魔をする

ネットが邪魔をする

ただ地面にかいた白い線が邪魔をする。

邪魔をするものがなければいい。

だけど

「邪魔」がみんなを楽しませる

テニスにはみんなが嫌いな「邪魔」が必要。

「邪魔」だけどジャマではない。

人吉2年

太田 優衣

【評】スポーツ(テニス)のルールを「邪魔」だと、全部の連で連呼し、そのあと、ひよいと「邪魔」がみんなを楽しませると詩に書く詩人は、終行で「邪魔」だけどジャマではないと断言。堂々とユーモラスな一篇。

「空を見る」

たくさん物の下で空を見る

その物たちの間から見えたボロボロの町

月に照らされたぼくらの町

何があったのか、よくわかんない

ただくらくて、こわい

わかんない、けどこわい

学校のたいいくかんで空を見る

きょうはちよつとこわくない

パパといっしょ

はんぶんこしたおまんじゅう食べて

ダンボールふとんでゴロゴロした
ママに会いたい
おさんぼしながら空を見る
おはなみのときのさくらの木
ぜんぶちっちゃったけどだいたいじよぶそう
らい年もいつしよに行きたいと思った
ママはいつ帰ってくるかな
パパはいつ泣きやんでくれるかな
さくらだらけの空を見る
お父さんと熊本じょうを見上げた
ぼくの家よりすぐくわわれていた
さくらの下を通るとき
お父さんをつないでいない左手はさびしくて
さびしくてさびしくて何かをにぎるふりをした
教室の窓から空を見る
あの日から桜が三回咲き
ぼくは堅苦しい制服を身につけることになった
町も少しづつ戻ろうとしているらしい
「あたり前」を噛み締めながら空を見る
空を見る

大津2年 赤元 麻里子

【評】へあの日から桜が三回咲きの一行が、詩の歳月を日々新しくします。終行のへあたり前を……が、三年前の地震体験を書き切っています。熊本県にも、ようやく空が語りかけてくる日が戻って来ましたね。

「月日」

うんと見上げたその先に、
おばあちゃんが笑ってこちらを見ていた。
少し見上げたその先に、
おばあちゃんが料理をしていた。
同じ目線のそのときは、
一緒に料理を作ったよ。
少し下を見たときは、
おばあちゃんちんまり座ってた。
ずっと下を見る今は、
おばあちゃんは静かに寝るばかり。

「背伸びたね」
下からやさしい声がする。

尚綱2年 中林 萌々子

【評】へ月日はおばあちゃんと共に人生の位置を変えて移ろう、少年の歳月。歳月を共に過ごせた作者の愛情が素晴らしい日々の記憶を、しっかりと詩に書きました。へさみしかつ

たら、詩で会える。私もそう思っています。

「美しく咲いている」

美しく咲いている
その茎はとても丈夫で
どんな言葉にも折れることがなく

美しく咲いている
その葉はともしなやかで
どんな重みにも立ち上がる

美しく咲いている
その根はとても重要で
どんな者からも必要とされる

美しく咲いている
その花はとても人気者で
どんな人からも愛される

独りで咲いている
どんなことから逃げず
気づけばそこに美しく咲いていた。

湧心館定時制2年 宮本 光輝

【評】美しく咲いている、で始まる。四連。コーラス部の終連だけが独りで咲いている。の全五行詩です。「名前のない」花は、全連全行の全てで花の中の女王のように誉めまられています。詩の位置で貴重な「花」です

▽入選

「じいちゃん」

あなたは空になった
私が産まれてくるすぐ前に

あなたは空が大好きだった
私も空が大好きだ

私はよくあなたの生まれ変わりだと言われる
あなたに会ったことはないけれど
あなたのことが大好きだ
いつもそばに居てくれる気がして
いつも守ってくれている気がして

いつかあなたに会えたならこう言いたい
「いつもありがとう」

そして二人肩並べて
あの大きな空を見上げるんだ

人吉2年 小城 都空

「真っしろ」

元気だったしろ
白くて、可愛いかったしろ
三時に遠吠えをしていたしろ
散歩が大好きだったしろ
おじさんだったしろ
あんまり吠えなくなつたしろ
歩くのが遅かったしろ
やわらかいご飯が好きだったしろ
白くて、可愛かったしろ
眠っているしろ

尚綱2年 工藤 しほり

「私と海」

私は海にいた
もう思い出せないくらい昔に
私は海にいた
たゆたいながら水に浮かんでいた

青
波音
さかな
きらめき
その全てが
私のところを
ぎゅっと掴んで
離してはくれない

白
砂浜
くらげ
濡れた髪
その全てが
私のまぶたに
焼きついている
焼きついている
私は海にいた

磯の匂いがしている

第二二年 美野田 愛

「言葉」

言葉は
喜怒哀楽を伝えられる
一つの方法

言葉は
文字だけでは
伝えることの出来ない
気持ちや感情を
相手に伝えられる贈り物

言葉は魔法だ

でも

たった一言で
相手との関係が
変わってしまう事もある

言葉は
魔法でもあるが
武器でもある

人は

それぞれ
自分らしきがあつていい

私は自分らしさを壊さず
これからの人生を
作って行くのだ

言葉の魔法は
自分にも相手にも
大きな力になる

決して
相手や自分を
傷つけないければ

鎮西2年 代々 結莉亜

「競走」

大丈夫

まだ大丈夫
ちよつと危ない
危ない
時間との競走
仕事が終わる
夕立に打たれながら
学校へ向かう
今日の始まり

湧心館定時制4年

橋本 陸翔

▽努力賞

「七色の光」

ボクは知らない
明日が来ることを
今日という日が続いていくことを
当たり前だと思ってる
「明日からする」
何度も使ってきた言い訳
「あの頃に戻りたい」
輝くのは戻らない日々だけ
今日も無駄を過ごし
増え続ける過去を羨んだ
ボクは知らない
いつかおわってしまう明日に
いつか終わってしまう今日に
永遠を錯覚してる
大きくなればもっと
晴れた視界で綺麗な色を見れる
期待しただけで
掴もうとはしなかった
いつからか色はどんどん黒ずんで
未来が遠ざかっていくような気すらした
ボクは知らない
明日に光は差しているのか
今日は何色を生きているのか
雨上がり、絶望に空を仰いだ
くすんだ目に飛び込んだのは七色の光
それは今まで見たどんな色よりも綺麗で
どんな光よりも儂かった
遠ざかる未来に見つけたスタートライン
希望という光を胸に抱き
最初の一步を踏み出した

「シャツターをきる私」

キラキラ光る水滴をアクセサリー代わりに咲き誇る花を見つけた朝九時
小鳥がさえずりやさしい風を体いっぱい吸いに吸いこんで
思うがままにシャツターを切る私

窓から差し込むオレンジの光に誘われた夕方六時
外に飛び出ると
一面オレンジに包まれた景色に見とれ
慌ててシャツターを切る私

冷たい夜風に当たりながら冷たいお茶を一口飲んだ夜十時
綺麗な満月が街を照らす
街灯なんていらなくらいの光をあの人にも見せたくて
何度も何度もシャツターを切る私

人吉2年 蓑田 まや

「空」

空が好き
形をもたない空が好き
包んでくれる空が好き
空にはきつと何かがある
だって

地上に海に
こんなにもたくさんの命があるんだから
あの雲のすきまから
何かやってこないかな
こんなこと言ったら笑われちゃうね
私は言った
君は言う
そうかな 夢があつていいじゃない
——そう言ってくれる君が好き
なんて言わないけどね

玉名1年 森本 耀雪

「母」

尊敬する人
それは母

一人で三人の子育てをして

大津2年 中野 友結

みんなにいつも寄り添ってくれた
母が言った

「着物が着たい」

「それは死ぬ時かな」

準備が大変だとわかったけれど

「私の卒業式に着て」

母は願いを叶えてくれた

着物姿を見て

今まで迷惑かけてきたことを思い出して

私は涙があふれた

あの時の母はとても輝いていた

湧心館定時制1年

片山 琴鈴

「めくると始まる」

カーテンをめくると今日が始まる。

カレンダーをめくると今月が始まる。

アルバムをめくると思い出話が始まる。

こいつらをめくりながら

私の人生の1ページを今日めくろ。

人吉2年

徳永 さくら

▽学校奨励賞 湧心館定時制

【総評】よそ行き顔で気取りまくった特別の詩の言葉などは、どの詩にも全くありません。

たくさんの参加作品たちが、“あるがままのこころ”の書き手の高校生たちとともに、また今年も、自由詩部門のドアを大きく開いてくれました。

毎年がそうであるように、地震を乗り越えた熊本城を見上げる素顔の若々しい、県内の高校生の皆さんの応募作品の中から、最優秀賞、優秀賞、入選、努力賞へと選考、選評が始まります。

特に今回は、応募作品もレベルアップし、女生徒優先だった自由詩部門が、男生徒も肩を並べ、ほぼ男女互角の熊本現代詩となっておりました。厳しく、豊かに選考をさせていただきました。

詩編と私は、互いに強く激しく、まるで憎んでいるかのような鋭い視線でにらみ合います。原稿用紙のマス目の中から選ばれた日本語のたちの内心が、たぶん最高の修羅場でしょう。

一席の最優秀賞に選んだ「たからもの」は、自然体での力みのなさが今回のナンバーワンの輝きでした。あるがままの、その都度の文章で、最優秀の美学をしっかりと握りました。まさに個性の勝利といえます。それから優秀賞、入選、努力賞を5点ずつ。

全員の参加作品たちの笑顔の中、こうして現代詩を書く高校生の勇氣に、一年に一度だけの授賞の声を大切に告げられるのです。おめでとございます。(丸山)

【肥後狂句部門】

▽最優秀賞

早かなア いだてんだった平成は

玉名1年 東 美桜

【評】三十年余りの平成。思い返せば、あつという間に通り過ぎていったような気がする。その速さを、地元出身で今年の大河ドラマの主役だった金栗四三さんのいだてんぶりに重ねている。着想が面白い。

▽優秀賞

宝物 見つけ出すのが人生だ

第二2年 長濱 勇気

【評】人生は、人にとっての一番大事なものを探し続ける旅かもしれない。

宝物 君と競ったマメの数

城北2年 菊川 奨悟

【評】運動部の部活で手に何べんも作ったマメ。厳しい練習を重ねた証しだ。

ようこそ令和 少し気温を下げてください

熊本工1年 岩永 真依

【評】温暖化は人類の大きな課題。令和の時代こそ、温暖化の解消に本腰を入れてほしい。その思いがこもっている。

早かなア 土日の時間五倍速

球磨工2年 中島 洸志

【評】勉強の時は時間がなかなか進まない。逆に休日の楽しい時間は早く進むものらしい。

宝物 目には見えない家族愛

球磨中央3年 中川 花鈴

【評】あまりみんな意識していないが、家族のきずなに勝る宝物はないということだろう。

▽入選

ようこそ令和 何度も直すHの字

球磨工2年 杉下 紘生

早かなア 寝たら五秒で朝がくる

第二2年 道野 公貴

早かなア ミンミン消えてリンリンか

城北2年 能瀬 愛裕美

早かなア 悪い噂の流るつと

文徳2年 石原 裕太郎

宝物 握り続けたこのパドル

球磨工3年 立岩 颯仁

▽努力賞 (一部の作品は選者が添削しています)

早かなア 浴衣着らんで夏終わる

第二2年 厚地 ひなの

宝物 みんな違ってみんな良か

球磨工3年 田中 歩夢

ようこそ令和 これから君が先頭

大津1年 下田 愛咲

宝物 LINEができるタブレット

熊本かがやきの森支援学校1年 中山 航太郎

ようこそ令和 よか時代の香りがする

熊本信愛女学院2年 高橋 七穂子

宝物 伝統守る神楽舞

高森3年 飛瀬 瑛貴

宝物 家から見える矢筈山

芦北3年 後藤 琢水

宝物 有明の幸民の幸

熊本学園大学付属2年 林田 涼佑

早かなア 春が終わればもう真夏

湧心館定時制1年 濱田 沙羅

早かなア 別れる時間すぐに来る

盲学校3年 金子 桃和

▽学校奨励賞 高森

【総評】肥後狂句は、熊本で生まれ、育った独特の短文芸です。世相風刺、人情の機微を詠むのが特徴で、熊本弁も自由に使えます。他の短文芸でも同じですが、何を、どう詠むか、ということが一番大事です。作り方は、出された笠(お題)に十二音で付け句します。付け句は、七五調が基本です。わずか十二音という制約された中での作句は困難を伴いますが、どう省略するかがポイントです。

今回の応募は千八百七十四句。昨年より五百句近く増えました。若い人たちが肥後狂句に関心を寄せていただいたことはうれしい限りです。字余りや、笠と付け句の中身が合わない句もありましたが、若者らしい新鮮な観察眼、はつらつとした発想もあり、私が学ばせてもらった面もありました。社会人になっていつかまた肥後狂句に関心を寄せてもらう日が来ればと願っています。(野方)